

読者からの手紙

『偕行』を手にして

陸軍少年飛行兵第17期(甲種)

大橋 健一

編集委員：本稿は、本年7月に偕行社
会員大橋健一様から編集委員宛にい
ただいた手紙を、ご本人の了解を得
て掲載するものです。大橋様は戦後、
脚本家等として活躍され、作品に
長門勇／岩下志麻主演の『駆逐艦雪
風』等があります。

前略 私はず年の『偕行』9・10
月号に、「日本陸軍最後の操縦訓練の
記録」を掲載していただいた者です。
今年、95歳になりました。あれから
早や一年、今月も『偕行』を手にす
ることができました。先ずは、一言
お礼を言上致したく失礼する次第で
す。

お陰でこの一年、『偕行』6冊を拝
読することができました。その感想
の第一は、「勿体ない」でした。私が
読んだのは僅かに6冊。だが、そこ
に掲載された記事内容は、他に求め
ることができない貴重なもの。これ
を読むのは先ずは会員のみ。まさに

「何と勿体ない」、何とか一般の人々
にも読む機会や場が欲しいものと痛
感していました。

そこで私は馴染みの散髪屋にある
『寄贈本棚』に2カ月毎に読後の『偕
行』を寄贈することにしました。そ
の後、年嵩の女店主が「これを読ん
だお客さんが、『こんなものどこで手
に入れたの? 他に飛行機や自衛隊
関係のものはないのか?』と聞かれ
ました」と私に言うのです。さらに、
「この時期だからか、皆さん自衛隊
への関心は強いみたいだけど、多く
のお客さんは自衛隊のことをほとん
ど知らないようだった」とも言われ
ました。

ちなみに、警察官は全国で30万人。
陸上自衛隊員15万人。このことを
知った私自身、大変驚きました。こ
の状態で国を守ることはできるので
しょうか?

そういえば、故障した飛行機を修
理するのに、別の修理待ちの機から
部品を取り外して修理に使うのだと
聞きました。戦車でも同じ事態があ
るのでは? 一般の人々、就中政治
家たる国会議員はこうした現状を何
と考えているのでしょうか、否、あ
るいは不勉強でこうした事態を知ら

ないのでは? と不安が募ります。

自衛隊と言えば、人々は「地震、
洪水、大雪などの災害活動で活躍す
る姿」を思い浮かべます。しかし本
来の国を守る任務や普段の厳しい訓
練に思いが及ばないのでは。

これは何故だろう。いくつかの理
由があるはずですが、国が、政治が自
衛隊へどう対応しているのか。その
結果が国民の意識となるのは当然で
す。一方、自衛隊自身にもその責任
の一端はあるでしょう。私は「もの
言わぬ自衛隊」から「もの言う自衛
隊へ」の脱皮が必要だと思っております。

現役の自衛官からの発言・発表は
無理だとしても、現役を終えた方々、
例えば、偕行社やその会員の方々が
持つておられる経験、知識、見識等
を今一度国家国民のために奉仕貢献
していただくのが良いと思います。

すでに一部の方々がマスコミを通
じて貢献しておられる姿を承知して
います。その発言やその他の記事内
容は私のようなごく普通の国民には
ただただ目を見張るもので、ときに
驚き、ときにそれへの無知に愕然と
なるほど凄くと思います。一方、自
衛隊の現状への思いを馳せると自衛
隊が存分に働けないのではという危

惧、さらには政治家への不信の思い
を強くするのです。

思うに、偕行社関係の方々を考え
ておられる以上に、一般の人々は自
衛隊のことはほとんど知らない、こ
れが現実で実に重要な点です。

ちなみに、今日まで私自身の自衛
隊との接点について振り返ってみる
と…

・1970年ごろだったか、航空自
衛隊入間基地での航空祭。子供同伴
で見学参加(ここは旧陸軍航空士官
学校、旧わが母校)

・航空自衛隊熊谷基地での旧軍慰霊
祭に出席

・江田島の海上自衛隊幹部候補生学
校見学

・陸上自衛隊の富士総合火力演習の
見学(元陸上自衛隊員の誘いで見学)
・他に戦友会仲間と共に数カ所の航
空自衛隊基地見学

以上のとおり数少なく、かなり関
心を持つてきた私自身でもこの程度
です。こうした点から見ても、多く
の人々が「自衛隊のことはほとんど
知らぬ」というのは残念ながら現実
だろうと思います。

そこで、ここから「老衰の独り言」
を呟いてみます。

前述した、旧軍の慰霊祭で熊谷基地を訪れた際、白い体操服の若者集団が飛行場の周辺を走るのを見ました。その姿は、昔の我々にそっくりでした。現在の航空自衛隊にもこのような制度があり、今も多くの若者が汗を流して懸命に励んでいる。

これに似た風景を見たのは江田島を訪ねた際に案内してくれた若者少年術科学校（現在はすでに廃止された・編集注）の生徒だという。一人は中学を卒業後、一人は高校一年から入校したという。キリツと胸を張る姿に、思わず「頑張ってください」と声をかけました。まさに昔のわが姿を見る思いで、涙を抑えられませんでした。

後で聞くと陸上自衛隊にもこのような若者が励む制度があるとのことでした。私は寡聞にして知りませんでした。全国のほとんどの中学生・高校生も、自衛隊にこのような制度があることを知らないのではないかと思います。

以上、いろいろと書き連ねましたが、言いたいの「自衛隊は国民への現状周知への努力が不足」していると思います。自衛隊といえども、政府とともにともっと広い範囲

の広報に努めるべきです。

自衛官の特典も不明。魅力に乏しいのでは、若者の夢の対象にもならないでしょう。

ここまでの「独り言」だけでもご推察のとおり、単なる国を思う老人ですら、何とものがっかり落胆の思いがします。

気を取り直してもう少し独り言を続けてみましょう。

いろいろあるが、やはり一般人の人々よりも前に、政治家に自衛隊を知ってもらうのが第一です。畏れずに言えば、政治家にはもっと勉強してもらわなければいけない。政治の理解なくしては何事も始まらない。

その方法の一つとして、与党、野党を問わず、すべての政党に『偕行』の見本を届け、国会議員の読者を得ることで、とりあえず、『偕行』のみで始める。さらに「陸・海・空」三者のものが重要です。このための資金集めも重要です。

現在の緊急課題は、自衛官の緊急確保でしょう。これは一刻の猶予もない重要事です。防衛省でも懸命に対策をしていると思うが、それは「自衛官を確保したい側」のものです。重要なのは、「自衛隊で活躍をしたい

と考えている若者の側」にとつて必要な待遇、生き甲斐、夢の実現に結び付く内容をお知らせすることが必要です。

私なら先ずは現在活躍する自衛官25万人に聞いてみる。不満もあれば、現実的な夢や希望、更には思いがけない知恵やアイデアが出てくるかもしれない。

ともあれ、自衛官の確保は簡単ではないことはよく分かります。政府は少子化対策に懸命なようですが、それは将来永く続けることで、自衛隊員の確保対策は緊急に今必要なことだと思えます。

子供のころ、歴史好きだった私は「人はいつの時代も懸命に生きるもの」と読み知ったものです。後年、私はこのことを、身をもって体験することになりました。敗戦直前の2カ月間の日々、陸軍航空士官学校での操縦訓練。それはまさに死ぬための訓練でした。愚直にも、我々訓練生は死ぬためにさえ懸命に励み努力したので。こうした経験が今の私を楽天的にするのかも知れない。現在の若者にも、懸命に生きる思いがあり、その思いが重なれば、自衛官の充足は十分に可能だと思えます。

それは大仕事ではありません。でもいつの時代にも若者は夢を追い、その実現のためには汗を流す。これを信じて大人たちも汗を流し協力してあげたい。

ここまで思いつくままに好き勝手に書き、呟いてきました。だが、所詮は枝葉の議論、肝心な点は、国民が、政府が自衛隊の存在をどう認識し、どう位置付けるか、すべてはこの一点にかかっています。

今こそ国民は、国会は、正面から議論して必要な憲法改正を決断すべきでしょう。

正直に言えば、昨年夏ごろまで「自衛隊の実力は世界第3位、いざというときには30万の優秀な隊員が、最新の武器弾薬で勝利するはずだ」と私は漠然と考えていました。

ところが、6冊の『偕行』のお陰で現実を知り、我が無知に驚き愕然としました。ともあれ、この一年で『偕行』から多くのことを学ばせていただきました。

偕行社編集委員の皆様、今後ともさらに素晴らしい『偕行』を発行され、一人でも多くの方がこの『偕行』を読むようになるよう応援したいと思います。

以上、いろいろと書き連ねましたが、言いたいの「自衛隊は国民への現状周知への努力が不足」していると思います。自衛隊といえども、政府とともにともっと広い範囲